

オナメとモトメー悲劇的な後生掛の由来

温泉を見下ろすと、活発に噴気するいくつもの噴気孔と、湯気を立てて勢いよく噴き上がる湯が見えます。前方右手にある幅 2 メートルの噴湯孔に注意を向けてみましょう。これは地元の方言で「妾」を意味する「オナメ」と呼ばれます。その右にある激しく湯気を上げる小さな噴気孔は「本妻」という意味の「モトメ」と呼ばれています。これらの名称は、この激しい風景で語り継がれる悲恋物語に由来します。

物語は、牛で荷を運ぶ若い男が強盗に騙され打ちのめされたところから始まります。巡礼中の若い女がこの男を見つけ、温泉に運んで傷を癒し元気になるまで看病しました。二人は恋に落ち、ともに暮らし始めました。

しかし、その若い男には秘密がありました。彼には既に久慈の町（現在の岩手県）に妻と息子がいたのです。ある日、夫が生きていると耳にした最初の妻が温泉を訪れ、若い女性に会いました。騙されていたと知った若い女は噴気孔に身を投げました。妻は女の犠牲の重さに打ちひしがれ、後の世で夫と再会することを願ってすぐに身投げした女の後を追いました。その後、この温泉は、後世を信じて「後生を掛ける」この行いにちなんで名付けられ、それが長い間に縮められて現在の「後生掛」という名になりました。それ以来、これらの噴気孔は妾と正妻の犠牲を悼んでオナメ・モトメと呼ばれています。